

『鳳城聯句集』訓注稿(三)

楊 昆 鵬

本稿は版本『鳳城聯句集』所収聯句作品について、試みに読み下しを施し注釈を付けたものである。前稿(『京都大学国文学論叢』第三五号、平成二八年三月)の続きとして、全三十作のうち、第七から第十までの四点をここに掲載する。

【作者】(初出人名のみ)

(第八)

宗倫 不詳。

守浣 不詳。

(第九)

光勝 周南円旦、僧侶(臨濟)。生年未詳、正保四年(一六四

七)没。法諱、初め光勝、のち円旦。

【凡例】

- ・ 五言の句冒頭に通し番号を付した。
- ・ 漢字の字体は原則として現在通行のものに統一した。
- ・ 訓点は底本のままにし、読み下しは原則として訓点に従うが、一部句意に基づき変更したものもある。なお、読み下しに適宜濁点を施した。

- ・ 明らかな誤字もそのまま翻刻し、期待される本文を右傍に(某カ)のように注記した。
- ・ 注は最小に止め、難読箇所や一部の熟語について典拠と用例を示す。

虞第七 慶長十八年正月二十二日

1 鶯^ハ向^テ風^ニ神^ニ唱^フ 鶯は風神に向かひて唱ふ

2 寿^メ梅^ヲ請^{シヤ}禱^シ無^ト 梅を寿して禱らんと請はんや無きやと

3 鳳^ハ知^テ天^ニ聖^ヲ至^ル 鳳は天聖を知りて至る

4 停^テ竹^ヲ現^レ祥^ヲ乎 竹に停まりて祥を現ずるか

5 山^ハ彩^ス堯^ノ眉^ハ八^ノ 山は堯眉の八を彩す

6 世^ハ疑^ニ君^ノ実^ヲ迂^リ 世は君実が迂を疑ふ

雲

節

宮

重

7 清朝夷亦洛 清朝 夷もまた洛 潤

8 戦局越兼呉 戦局 越と呉と 御

9 鶴蓋飛仙具 鶴蓋 飛仙の具 賢

10 驢詩行客図 驢詩 行客の図 岳

(1) 「風神」は風采・神韻の意味で用いられることが多いが、ここは黄庭堅「河伯借泥封玉腕、風神翻浪沃香腮」のように風を司る神の意。

(2) 遠山を美女の眉と喩える表現が漢詩にあるが、ここは逆に聖人の八色の眉を使って彩る山を比喻する。曹植「堯眉八彩、舜目重瞳」(曹子建集)。

(3) 司馬光、迂夫と号す。蘇軾が詩「司馬君実独樂園」を作り、司馬光の朝政から遠ざかることすなわち「迂」の姿勢に疑問を呈し、政界復帰を切望した。詩中「兒童誦君実、走卒知司馬」とある。

(4) 清明な朝廷。蘇軾「清朝竟不用、白首仍憂時」(故李誠之待制六丈挽詞)。また「洛」は司馬光の独樂園の所在地である洛陽からの連想か。

(5) 驢馬に乗る詩人像は蘇軾「雪中騎驢孟浩然、皺眉吟詩肩聳山」(贈写真何充秀才) など多く、また画題にもなった。

11 絮輕詛雪颺 絮輕やかにして雪の颺ぐかと詛る 璘

12 竿動覺峰趨 竿動きて峰の趨るかと覺ふ 寿洪

13 雁楚雲湘水 雁は楚雲 湘水 賡

14 蟾松江洞湖 蟾は松江 洞湖 緒

15 秋心礎愜素 秋心 礎は素に愜ふ 竹

16 閨夢枕欹孤 閨夢 枕は孤を欹つ 重

17 塵聽旅檐雨 塵を塵す 旅檐の雨 宮

18 煖身茗岸壚 身を煖む 茗岸の壚 節

19 良媒琴挑卓 良媒 琴卓を挑む 雲

20 說士壁頌虞 說士 壁虞を頌つ 潤

(6) 『韻府群玉』孟浩然「吾詩思在風雪中驢子背上」(嘗於灞橋冒雪騎驢尋梅花) という。

(7) 「蟾」は月。杜甫「刁斗皆催曉、蟾蜍且自傾」(八月十五日夜二首其二)。梅堯臣「孤舟洞庭去、落日松江宿」(送良玉上人還昆山)。「洞湖」と13句の「湘水」で瀟湘八景を踏まえる。

(8) 「秋心」は「愁」。「愜素」は韋応物「分曹幸同簡、聯騎

方愜素」(晚出府舍與独孤兵曹令狐士曹南尋朱雀街歸里第)に用例は見えるが、ここは「素懷」・「素心」の略で、

気持ちにかなう意か。『三体詩』熊孺登「一見清容愜素聞、有人伝是紫陽君」(贈俟山人)。

(9) 熟語「塵聴」は世俗の音という意、「聴を塵す」と訓む場合は耳を汚す、旅愁を誘うことか。策彦周良「餘寒花

晚旅檐雨、若是無詩春不春」(和大光試筆韻)。

(10) 「茗岸」は茗花の咲く岸辺、「墟」は土で出来た墟。蘇軾「茗岸霜花尽、江湖雪陣平」(南歌子・湖州作)。

(11) 「良媒」は媒酌する人間の意であるが、ここは琴という良き媒をいう。司馬相如が琴を弾き、卓文君に好意を伝えた故事(史記・司馬相如列伝)。

(12) 『史記・平原君虞卿列伝』「虞卿者、遊説之士也。躡躡檐簞説趙成王。一見、賜黄金百鎰、白璧一双」。

21 好景遊方境 好景は遊方の境 御

22 衡杓造化枢 衡杓は造化の枢 賢

23 栽花無醜樹 花を栽ゑては醜樹無し 岳

24 観柏个团蒲 柏を観ず 个の团蒲 璘

25 貧道富金口 貧道 金口に富む 洪

26 多聞入鎖鬚 多聞 鎖鬚より入る 竹

27 不才如是我 不才 如是の我 澗

28 齊物寓言夫 齊物 寓言の夫 麋

29 愁海鵬難搏 愁海 鵬も搏ち難し 御

30 飢時鷹待呼 飢時 鷹は呼を待つ 岳

(13) 「衡杓」は北斗の第五星である「玉衡」と北斗の柄の部分を用いて「杓」を合わせて北斗の柄をいうか。

(14) 梅堯臣「野鳧岸眠有閑意、老樹着花無醜枝」(東溪)。花を咲かせるすべての木々が美しい、それが22句「造化」の力である。欧陽修「造化未嘗私一物、各随妍醜自芳菲」(春帖子詞皇帝閣六首其五)。

(15) 禅院に植えられた柏を眺める。蘇過「西隣正想蒲団穩、古殿遙瞻老柏双」(次韻叔父小雪二首其一)。

(16) 金口は如来の口舌、またその教え。ここは後者か。

(17) 『緇門警訓』「結集法藏阿難從鎖鬚入、誦出仏経一無遺漏」。

(18) 『莊子・内篇』「齊物論」を詠む28句を承けて、「逍遙遊」の鵬を連想。

31 指引眼指劫 指引 指を眼すれば劫 竹

32 生^シ計^ハ 寄^シ生^ハ 與^ヲ 生計 生を寄せしは與⁽²⁰⁾

33 紅^ハ 裊^ム 柔^ニ 條^ノ 槿^ノ 紅は裊む 柔條の槿

34 碧^ハ 凋^ル 落^ル 葉^ノ 梧^ノ 碧は凋む 落葉の梧

35 代^ニ 昭^メ 今^ニ 道^ノ 舜^ヲ 代昭^{あきら}にして今は舜^ノを道^ノぶ

36 湖^ハ 勝^レ 古^ノ 棲^ニ 通^ヲ 湖勝れて古は通を棲ましむ

37 縛^メ 月^ヲ 愛^フ 繩^ヲ 短^シ 月を縛して愛繩短し

38 探^デ 幽^ヲ 吟^ハ 杖^ヲ 扶^ク 幽を探して吟杖扶^{たす}く

39 屏^ハ 居^ニ 寧^ニ 履^ニ 棘^ヲ 屏居⁽²²⁾ 寧ろ棘を履かんや

40 新^ニ 火^ヲ 好^シ 鑽^ル 榆^ヲ 新火⁽²³⁾ 榆を鑽るに好し

(19) 景徐周麟「老去易忘屢眠指、三年一別数秋堂」(翰林胡
蘆集「次韻悼孫藏主」)。

(20) 須臾、短い時間、31句の「劫」と対偶する。

(21) 西湖に隱遁する林逋、治世をもちたらしめた舜の対。

(22) 来客を拒み隱居すること。柳宗元「屏居負山郭、歲暮驚
離索」(郊居歲暮)。

(23) 『論語・陽貨』「鑽燧取火、期可已矣」に対して何晏集解
は馬融説を引き『周書・月令』有更火之文、春取榆柳

之火、夏取桑柘之火」とする。李嶠「槐煙乘曉散、榆火
応開春」(寒食清明日早赴王門率成)。

41 縦^レ 目^ハ 晴^ニ 欄^ノ 上^ニ 目を縦^{ほい}にす 晴欄の上 岳

42 深^ニ 思^フ 險^ニ 棧^ノ 紆^フ 思を深くして險棧紆^{まど}ふ 宮

43 蜀^ノ 全^ハ 予^ノ 漏^ル 屋^ヲ 蜀の全は予が漏屋 竹

44 揚^ハ 一^ツ 賈^ノ 塵^ノ 衢^ヲ 楊の一つは賈の塵衢 雲

45 茉^ニ 笑^ニ 施^ハ 如^レ 在^ス カ 茉笑んで施在すが如し 璘

46 菊^ヲ 摧^ケ 陶^ノ 就^ニ 蕪^ニ 菊摧けて陶蕪に就く 澗

47 蝶^ハ 非^メ 真^ニ 醉^ニ 醉^ニ 蝶は真醉に非ずして酔ふ 雲

48 蛛^ハ 以^ニ 耳^ヲ 濡^ニ 濡^ヲ 蛛は耳濡を以て濡ふ 洪

49 灯^ハ 掛^フ 無^ニ 声^ヲ 瀑^ヲ 灯は無声の瀑を掛く 雲

50 丹^ハ 還^ニ 換^ニ 骨^ヲ 炉^ニ 丹は換骨の炉に還る 御

(24) 「予」は蜀に住み着いた杜甫か。「床頭屋漏無乾処、雨脚
如麻未断絶」(茅屋為秋風所破歌)。

(25) 「楊」は楊貴妃、「賈」は国政を憂う賈誼か。

(26) 「陶」は「三径就荒」(帰去来辞)の陶淵明であるが、45

句に西施とあるので、陶朱公からの連想。

(27) 灯の光を瀑布と喩えるか。魚第六11句に既出。

51 隻一宵、誰り百菓、
隻宵は誰が百菓ぞ

52 万歳、彼、三十壺
万歳は彼の三壺

53 兜一卒、楽天院
兜卒は楽天が院

54 竺乾、孔子、桴
竺乾は孔子の桴

55 仁一田、耕以筆
仁田 耕すに筆を以てす

56 宦一、路、苦之、轆
宦路 苦しみの轆

57 青鎖、限、門、柳
青鎖 門に限する柳

58 白一、漫、隔、岸、蘆
白漫 岸を隔つる蘆

59 波、欺、過、渡、歳
波は過渡の歳を欺く

60 臘、仰、見、星、瞿
臘には見星の瞿を仰ぐ

(28) 「百菓長」の略か、酒は百菓長と呼ばれる(佩文韻府)。

独りの夜の寂しさを酒で慰めるのは誰か。

(29) 兜率天、知足天とも。欲界六天中の第四。

(30) 仏の別称。『弘明集』に「老子即仏弟子也。故其經云、聞道竺乾、有古先生」とある。白居易「從此始堪為弟子、竺乾師是古先生」(齋戒)。

(31) 仁義の田か。「仁田義鋤德其種、晚歲坐看苗幪幪」(宋・李流謙「挽王隱君」と見えるが、用例は希少。

(32) 沈約「散朱庭之奕奕、入青鎖而玲瓏」(八詠詩・登台望秋月)など、美しい宮殿の意。ここは門に青柳が纏う比喩で青鎖という。

61 送、照、鐘、猶、色
照を送る鐘猶ほ色めく

62 酌、霞、鏡、半、朱
霞を酌みて鏡半ば朱し

63 浮、蹤、情、始、薄
浮蹤 情の薄きに始まる

64 騷、会、意、多、娛
騷会 意の多きは娛しむ

65 繡、睡、譜、休、暇
睡譜を繡くは休暇

66 転、和、氣、孟、陬
和氣を転ずるは孟陬

67 芳、園、禽、作、吏
芳園 禽吏と作る

68 法、窟、毘、匡、徒
法窟 毘徒を匡す

69 岳、

69 鈍^{シトス} 鎧^ツ 詞^ツ 鋒^ツ 陸 鎧を鈍^{にぶ}しとす 詞鋒⁽³⁷⁾の陸 璘

70 投^ス 機^ツ 画^ツ 角^ツ 孚 機を投^スず 画角⁽³⁸⁾の孚 澗

(33) 入相の鐘が夕日を送る。「幾杵鐘声送夕陽、深紅淺紫月交光」(三益「月来花弄影」)。

(34) 『佩文韻府』に「混沌睡譜」とみえる。

(35) 「孟陬」は正月。「撰提貞於孟陬兮、惟庚寅吾以降」(離騷)。

(36) 五百人の毳衣を着た弟子。道潜禪師が初めて臨川に赴き浄慧禪師に謁し、将来五百毳徒を持ち王侯に重んじられると云われた。

(37) 「鏌」は名劍の莫邪。かの莫邪よりも鋭いのは陸機の詞鋒だ。駱賓王「潘陸詞鋒駱駟飛」(疇昔篇)。

(38) 前句「陸」から「機」字を連想し、仏語・悟りに転じる。画角は古樂器。「太原孚上座、五更聞画角」(五家正宗賛助桀)。

71 篋^ハ 禪^ハ 関^ハ 板^ハ 子 篋は禪関⁽³⁹⁾の板子 雲

72 棒^ハ 除^ハ 夜^ハ 金^ハ 吾 棒は除夜⁽⁴⁰⁾の金吾 澗

73 四^ハ 隊^ハ 魚^ハ 行^ハ 幾^ハ 四隊 魚行いくばくぞ 御

74 同^ハ 群^ハ 野^ハ 鹿^ハ 俱^ハ 同群 野鹿⁽⁴¹⁾俱にす 廣

75 楽^テ 容^ル 環^ハ 堵^ハ 膝^ハ 楽みては環堵⁽⁴²⁾の膝を容る 洪

76 仕^テ 愧^ル 興^ハ 一^ハ 台^ハ 軀^ハ 仕へては興台⁽⁴³⁾の軀を愧づ 璘

77 弥^ハ 俗^ハ 臥^ハ 開^ハ 李 弥俗⁽⁴⁴⁾なり 臥して開く李 雲

78 若^ノ 人^ハ 遍^ハ 挿^ハ 萸^ハ 若の如き人遍く萸を挿す 岳

79 担^レ 恩^ハ 肩^ハ 豈^ハ 息^ハ 恩を担ふ 肩あに息んや 御

80 結^テ 患^ハ 影^ハ 甚^ハ 羶^ハ 患を結びて影甚だ羶す 洪

(39) 機械装置または要。禅僧の日常修行に法具の竹篋が欠かせない。

(40) 皇帝や大臣の警護に当たる官名。次の73句とともに『三体詩』王建「金吾除夜進儺名、画袴朱衣四隊行」(宮詞)を踏まえる。

(41) 「環堵」は狭小な居室。陶淵明「環堵蕭然、不蔽風雨」(五柳先生伝)。黄庭堅「衡門低首過、環堵容膝坐」(顔徒樂貧齋齊二首、其一)。

(42) 身分の賤しい人。『文選』張衡「賁皇僚、逮興台」(東京賦)。杜甫「越羅與楚練、照耀興台軀」(後出塞五首、其四)。

(43) 蘇軾「臥開桃李為誰妍、对立鵲鵲相媚嫵」(上巳日、与二三子携酒出遊、随处見輒作数句、明日集之為詩、故辞無倫次)。

81 木―母 囀^{ヒスカン} 寒^ノ 重^ニ 木母 寒の重きに 囀^{かまびす}し
 82 花―王 移^ス 地^ノ 映^{タルニ} 花王 地の映たるに移す
 83 忘^ル 還^{コフ} 文― 圀^ノ 雉 還ることを忘る 文圀^{（45）}の雉
 84 求^ム 飽^テ 禹^{（46）} 一― 村^ノ 鳥 飽きてを求む 禹村^{（46）}の鳥
 85 感^デ 旧^レ 首^ヲ 丘^ニ 碣 旧を感じて丘に首する碣
 86 致^メ 忠 翼^{クル} 国 瑚 忠を致して国を翼くる瑚
 87 霜 巖^{イニメナヤス} 麻^ニ 荻^ニ 手^ヲ 霜巖そかにして荻手を麻す
 88 涯^イ 老 櫛^{ツレ} 蓬^ニ 顛^ヲ 涯老いて蓬顛^{（44）}を櫛る
 89 玉― 友 夭^{ナリトス} 彭― 祖^ヲ 玉友 彭祖^{（60）}を夭なりとす
 90 財― 童 師^{トス} 曼^ニ 殊^ヲ 財童 曼殊^{（61）}を師とす
 （44） 牡丹。策彦周良「木母堪寒山径斜、却嫌春色事豪奢。牡丹始識樵夫後、枉被人呼富貴花」（樵径梅）。牡丹は前句の「木母」すなわち「梅」と対偶される。
 （45） 文章の園。蕭統『文選』序「歴観文圀、泛覽辞林」。
 （46） 禹会村、禹が治水した村。蘇軾「樵蘇已入黄能廟、烏鵲

猶朝禹会村」（濠州七絶、其一）。
 （47） 死んだ後故郷に葬ること。屈原「鳥飛反故郷兮、狐死必首丘」（九章・哀郢）。碣は碣石山、禹の治水事業にみえる地名。
 （48） 瑚簋、治国の人材。『抱樸子』「器非瑚簋、必鋭進而退速」。
 （49） 「蓬顛」は蓬のように髪が乱れた頭。87句の荻手と対偶。
 （50） 玉友は仙人の別称。彭祖は八百歳まで生きた伝説上の人物（列仙伝）。
 （51） 善財童子、曼殊すなわち文殊菩薩の勧めで修行を積みはじめたという（華嚴経入法界品）。
 91 巧^{ニス} 言 饒^ニ 舌 鵲 言を巧みにす 饒舌の鵲
 92 説^レ 乱^ト 曩^ニ 膜^ニ 鸛 乱と説く 曩膜^{（52）}の鸛
 93 松^ハ 長^{ニス} 千^ニ 尋^ノ 翠^ヲ 松は千尋の翠を長ず
 94 蒲^ハ 抛^ニ 百^ニ 万^ノ 盧^ヲ 蒲は百万の盧を抛つ
 95 拾^デ 春^ツ 香 満^ニ 袖 春を拾ひて香は袖に満つ
 96 温^{メテ} 故^ツ 格 連^ス 珠^ヲ 故を温めて格は珠を連す
 97 唐^ハ 再^ヒ 斉 梁^ノ 李 唐は再び斉梁^{（54）}の李
 猶朝禹会村」（濠州七絶、其一）。
 （47） 死んだ後故郷に葬ること。屈原「鳥飛反故郷兮、狐死必首丘」（九章・哀郢）。碣は碣石山、禹の治水事業にみえる地名。
 （48） 瑚簋、治国の人材。『抱樸子』「器非瑚簋、必鋭進而退速」。
 （49） 「蓬顛」は蓬のように髪が乱れた頭。87句の荻手と対偶。
 （50） 玉友は仙人の別称。彭祖は八百歳まで生きた伝説上の人物（列仙伝）。
 （51） 善財童子、曼殊すなわち文殊菩薩の勧めで修行を積みはじめたという（華嚴経入法界品）。
 91 巧^{ニス} 言 饒^ニ 舌 鵲 言を巧みにす 饒舌の鵲
 92 説^レ 乱^ト 曩^ニ 膜^ニ 鸛 乱と説く 曩膜^{（52）}の鸛
 93 松^ハ 長^{ニス} 千^ニ 尋^ノ 翠^ヲ 松は千尋の翠を長ず
 94 蒲^ハ 抛^ニ 百^ニ 万^ノ 盧^ヲ 蒲は百万の盧を抛つ
 95 拾^デ 春^ツ 香 満^ニ 袖 春を拾ひて香は袖に満つ
 96 温^{メテ} 故^ツ 格 連^ス 珠^ヲ 故を温めて格は珠を連す
 97 唐^ハ 再^ヒ 斉 梁^ノ 李 唐は再び斉梁^{（54）}の李

98 帽^ハ枯^カ杭^カ密^ミ蘇^ソ 帽は枯る 杭密⁽⁵⁵⁾の蘇 璘

99 笠^{カサ}穿^テ難^ナ障^{サウ}霧^キ 笠穿ちて霧を障^はぎ難し 緒

100 紙^{カミ}貴^メ耐^タ傾^カ都^ツ 紙貴くして都を傾くるに耐へたり 竹

(52) 『説文』鵲^{セウ}。『正字通』「又名八哥、幽明録云、五月五日剪其舌端使田、教令学語、能人言」。

(53) 『宋書・武帝本紀』「劉毅家無担石之儲、樗蒲一擲百万」。

(54) ともに南北朝時代南朝の王朝であり、腐敗していたので国政が振るわず短命であった。李氏の唐王朝もまたその過ちを犯しているという。

(55) 杭州と密州、いずれも蘇軾が長官を務めた。帽は峨嵋山か。

斉第八 慶長十八年十二月二日

1 谷^ヤ寒^{サム}春^{ハル}早^{ハヤ}晚^{オソ} 谷寒くして春は早晩か

2 鶯^ウ似^ニ占^{シムル}幽^ウ棲^シ 鶯は幽棲を占むるに似たり 雲

3 雪^{ユキ}滿^ミ田^タ清^{セイ}潔^{ケツ} 雪満ちて田は清潔

4 鷺^ロ疑^ヒ下^ゲ二^ニ麋^ミ畦^ヰ 鷺は麋畦に下るかと疑ふ 御

5 風^{カゼ}揺^ユ蘆^{アシ}鼓^コ瑟^セ 風揺れて蘆は瑟を鼓す 節

6 露^{ツキ}凝^カ草^{クサ}磨^ス珪^ヰ 露凝りて草は珪を磨す 潤

7 月^{ツキ}暗^カ悲^カ秋^{アキ}宋^{ソウ} 月は暗し 秋を悲しむ宋 竹

8 隱^イ真^{ヘナリ}違^ヒ世^ニ斉^{セイ} 隱は真なり 世に違ふ斉 重

9 涼^{リョウ}蟬^{セン}嫌^キ夏^カ浅^{セン} 涼蟬 夏の浅きを嫌ふ 召

10 漚^ウ鳥^ニ戲^シ波^ハ低^ヒ 漚鳥 波の低きに戯むる 宗倫

(1) 『詩経・大雅・抑』「白圭之玷、尚可磨也」。

(2) 宋玉が『楚辞・九弁』を作り、「悲哉、秋之為氣也」と哀しんだ。宋玉悲愁。杜甫「垂白馮唐老、清秋宋玉悲」(垂白)。

(3) 叔齐。「世に違ふ」とは王位を引き受けず兄の伯夷を追って隠遁したことをいう(史記・伯夷叔斉列伝)。

11 漁^{イサ}笛^{フエ}江^{カハ}梅^{ウメ}落^{ツク} 漁笛 江梅落⁽⁴⁾ 守沅

12 朋^{トモ}樽^{サン}庭^{ニハ}竹^{タケ}凄^{シタリ} 朋樽 庭竹凄たり 齡

13 愛^メ賢^{ケン}濤^{タウ}避^{ヒク}晋^{シン} 賢を愛して濤は晋を避く 宮

14 荒^{アラシ}色^{シキ} 姒^シ亡^{ナシ}驪^リ 色荒んで姒は驪を亡ぼす 良

15 山―面 煙 為^ル黛^ト 山面 煙は黛と為る 緒

16 野生 暄 是^レ綿^イ 野生⁸ 暄はれ綿 雲

17 緑新^ニ蘇^メ石^ス髮^ヲ 緑新たに⁹して石髮を蘇す 御

18 暗^ニ理^{カフ}秣^ニ霜^ニ蹄^ニ 暗理 霜蹄に秣かふ 節

19 愧^レ白^ヲ妍^カ姿^ヲ岳 白きを愧づ 妍姿の岳 澗

20 籍^レ華^ヲ詞^ノ氣^ヲ嵇 華を籍く 詞氣の嵇 竹

(4) 野梅。張泌「宝箏橫塞雁、怨笛落江梅」(碧戸)。「三
詩」劉長卿「家空帰海燕、人老発江梅」(酬秦系)。

(5) 山溝、嵇康・阮籍らの賢者に追隨して交遊した。

(6) 周幽王が褒姒を寵愛し愚行を繰り返したため、西夷大戎
に侵攻されて驪山の下で殺され国を亡ぼした(史記・周
本紀)。

(7) 黃庭堅「群山黛新染、蒙氣寒郁郁」(辛酉憩刀坑口)。煙
は14句にある褒姒を喜ばせるためにいたずらに付けさせ
た烽火のこと。山面と黛の取り合わせは美人の化粧。

(8) 粗野な人にとって冬の日差しが厚着。負暄(列子・楊
朱)。

(9) 水辺の石に生える苔。『三体詩』陸龜蒙「天寒夜漱雲芽
浄、雪壤晴梳石髮香」(和皮日休酬茅山広文)。

(10) 美しい容姿。『世説新語』潘岳「姿容甚美、風儀閑暢」。
(11) 文辞の勢い。『晋書・嵇康伝』「嵇康 美詞氣、有風儀」。

21 於^レ松^ニ琴^ヲ巧^ク絶 松に於いて琴は巧絶 重

22 探^テ杏^ヲ榜^ヲ攀^ニ躋^ニ 杏を探して榜は攀躋 召

23 園^ニ日^ニ膏^ニ車^ニ蝶^ニ 園は日びに車に膏さす蝶 倫

24 臘^ニ残^テ膠^ハ柱^ニ鸛^ニ 臘は残¹⁰りて柱に膠する鸛 御

25 神^ニ遊^ニ無^ク処^ニ柅^ニ 神遊 柅¹¹らるゝ処なし 良

26 鄙^ニ句^ヲ辱^{ナク}頌^ツ批^ヲ 鄙句 批を頌¹²つことを辱なくす 沅

27 冷^ニ節^ヲ桜^ヲ燃^ユ雨^ニ 冷節 桜は雨に燃ゆ 雲

28 美^ニ陰^ヲ柳^ヲ繰^ル堤^ニ 美陰 柳は堤に繰る 宮

29 口^ヲ才^ヲ柔^ク語^ヲ燕 口才 柔語の燕 節

30 羽^ヲ長^ク徳^ヲ音^ヲ鶏 羽の長 徳音の鶏 澗

(12) 長安曲江にある杏園。科挙の合格者が賜宴を受ける場
所。「攀躋」は登ること。岑參「高山徒仰止、不得日攀
躋」(酬崔十三侍御登玉皇山思故園見寄)。

(13) 車に油を差す。韓愈「膏吾車兮秣吾馬、従子於盤兮終吾生以徜徉」(送李願肩盤石古歌)。

(14) 琴柱を膠で固定する。理論に拘泥し変通の利かないことの比喩。ここは臘月が残る春先の鶯が拙い音色で鳴き、琴柱が固定されたかのように音調の変化のないことを喩えるか。

(15) 「柅」は金属製の車止め、それを使って車を止めること。また熟語「檢柅」は不正行為を検査制止することを意味するから、ここは神遊を抑え止めることか。24句の拘泥

墨守からの転換。
(16) 批勅を頒ち賜うことか。

(17) 寒食節。韓偓「何処遇薔薇、殊郷冷節時」(寒食日沙畹雨中看薔薇)。この時節に桜が満開したか。

31 席^{シク}上^{イニヘニソフル}延^ニ堯^ニ席^ニ 上^{イニシヘ}に席^シく 堯^{イニシヘ}に延^{イニシヘ}ぶる席^ニ

32 題^{イス}思^シ媒^ミ祐^ニ題^ニ 思^シを題^ニす 祐^{イニシヘ}に媒^ミする題^ニ

33 不^レ秋^{ナカハル}翻^ハ涙^ニ葉^ニ 秋^{イニシヘ}ならずして翻^ハるは涙^ニ葉^ニ

34 繼^テ晷^ニ親^ム書^ハ藜^ニ 晷^ニを繼^テいで親^ムしむは書^ハ藜^ニ (20)

35 煉^ル石^ニ封^ニ候^ニ墨^ニ 石^ニを煉^ルる 候^ニに封^ニずる墨^ニ

36 興^ス叢^ニ接^ニ衆^ニ筵^ニ 叢^ニを興^スす 衆^ニを接^ニする筵^ニ

37 偃^ハ唯^ニ憐^ニ跛^ニ鼈^ニ 偃^ハは唯^ニだ跛^ニを憐^ニれむ鼈^ニ (21)

38 濟^ハ是^ニ振^ニ威^ニ猊^ニ 濟^ハは是^ニれ威^ニを振^ニふ猊^ニ 節

39 似^{タルコヘタリ}一^ニ似^ニ蒲^ニ青^ニ劍^ニ 似^{タルコヘタリ}たることは似^{タルコヘタリ}たり 蒲^ニの青^ニ劍^ニ 宮

40 明^{トス}明^ニ桂^ニ玉^ニ鏡^ニ 明^{トス}を明^{トス}とす 桂^ニの玉^ニ鏡^ニ 竹

(18) 杜牧「几席延堯舜、軒墀接禹湯」(華清宮三十韻)。

(19) 于祐。後宮に通ずる御溝から詩の書かれた流葉を書生が拾い、返事を書いて流し返したという故事。唐代の筆記

や小説に多く記載されるが主人公や話の筋が一樣ではない。ここは于祐とし、「方知紅葉是良媒」との件がみえる『青鎖高議・流紅記』を踏まえていると思われる。

(20) 読書の藜光すなわち灯火か。天祿閣で校書中の劉向に仙人が青藜杖で明かりを点した故事(太平広記)。

(21) 足の不自由な鼈、また愚鈍低劣な人もいう。「駟跛鼈而上山兮、吾固知其不能陞」(楚辞・言忌)。韓愈「伊余何所擬、跛鼈詎能踊(孟郊)」(会合聯句)。

(22) 菖蒲の葉を劍と喩える。唐・李咸用「柳眉低帶泣、蒲劍

銳初抽」(和殷衡推春霖即事)。

41 欲^レ晴^ニ峰^ニ幻^ニ出^ニ 晴^ニれんと欲^レして峰^ニ幻^ニ出^ニ (23)

42 薄^ハ暮^ニ路^ニ痴^ニ迷^ニ 暮^ハに薄^ハつて路^ニは痴^ニ迷^ニ 御

43 虫 豈^ニ織^リ而^テ衣^シ 雲

44 蛾^ハ其^ノ副^シ既^ニ筭^ス 竹

45 筭^カ森^メ駢^メ且^メ角^タ 重

46 趨^ハ熟^シ醉^シ如^シ泥^ノ 雲

47 姚^ハ魏^ハ王^ニ天^ニ下^ニ 姚魏^ハ天下^ニ王^{タリ}

48 羲^ハ和^ハ老^ハ郭^ハ西^ニ 召

49 声^ナ鐘^ラ声^ヲ四^モ達^ス 鐘^ハを^ナ声^ヲして^{ナラ}声^ハは^ヨ四^ニに^ヤ達^ス

50 手^{トリ}杖^テ手^ヲ輕^カ携^フ 杖^ヲを^ト手^ヲりて^ト手^ヲづから^ト輕^ク携^フ 重

(23) 黃庭堅「能和晚煙色、幻出歲寒身」(次韻子瞻題無咎所得与可竹二首粥字韻戲嘲無咎人字韻詠竹、其二)。

(24) 蛾眉の略で美女の意か。『詩経・鄘風』「君子偕老、副笄六珈」毛伝「副者、后夫人之首飾、編髮為之。笄、衡笄也」。

(25) 『論語・雍也』「犁牛之子騂且角、雖欲勿用、山川其舍之乎」。

(26) 牡丹花の品種名で、姚黄と魏花を合わせていう。『歐陽修全集・洛陽牡丹記・花釈名』にみえる。瑞溪周鳳「説

歐陽牡丹譜」二十四叢花品中、先看姚魏醉春風」など、

禅僧の間でよく知られたが、後陽成院にも馴染まれたか。

(27) 『山海経』『楚辞』などにみえ、伝説上太陽の母親また太陽を運行を司る神など複数の意味を持つ。ここは西に沈む太陽をいうか。

51 何^ノ晏^{ツル}約^{スル}花^ニ牧^ニ 何^ゾ晏^{ヤス}ん^ズる 花^ニに^ニ約^スする^ニ牧^ニ 良

52 改^ム名^ヲ賜^フ李^ヲ奚^ニ 名^ヲを^ニ改^ム 李^ヲを^ニ賜^フ奚^ニ 御

53 説^テ唐^ヲ鈴^ヲ彈^ス舌^ヲ 唐^ヲを^ニ説^クきて^ニ鈴^ハ古^ヲを^ニ彈^スず 沅

54 羹^テ建^ヲ茗^ヲ濡^ス臍^ヲ 建^ヲを^ニ煮^クて^ニ茗^ハ臍^ヲを^ニ濡^スらす 節

55 困^テ嗜^ム千^ノ年^ノ睡^ヲ 困^リて^ニは^ニ千^ノ年^ノの^ニ睡^ヲを^ニ嗜^ムむ 澗

56 憂^テ余^ニ七^ノ日^ノ啼^ヲ 憂^ヒて^ニは^ニ七^ノ日^ノの^ニ啼^ヲを^ニ余^ニす 御

57 水^ニ村^ニ魚^ハ市^ハ鬧^{ハシ} 水^ニ村^ニ 魚^ハ市^ハ鬧^{ハシ} 宮

58 旅^ニ寓^ニ雁^ハ雲^ハ睽^ク 旅^ニ寓^ニ 雁^ハ雲^ハ睽^ク 倫

59 離^ニ館^ニ宿^ニ誰^ハ恋^{ハシ} 離^ニ館^ニの^ニ宿^ニ 誰^ハか^ニ恋^{ハシ}ひ^ニん 竹

60 寂^ニ扉^ニ颯^ハ每^ニ擠^ス 寂^ニ扉^ニ 颯^ハ每^ニに^ニ擠^ス 召

(28) 北方少数民族への蔑称、李姓を賜ったというのは、唐の

皇帝が異民族を帰順させる政策か。 51句「花」の対偶としての「李」が名字でもある。

(29) 口に唱えて念じること。『三体詩』李洞「十万里程多少難、沙中彈舌授降龍」(送三藏帰西域)。

(30) 建溪、福建省の川の名で、「建溪茶」が有名。雪嶺永瑾「兩地風光供一啜、武陵紅雨建溪春」(桃花茶)。『三体詩』李涉「孤舟一夜東帰客、泣向春風憶建溪」(竹枝詞。前句に同じく『三体詩』の連想か。

(31) 伍子胥に倒された楚を救うために、申包胥が秦に援軍を求め、「包胥立於秦廷、晝夜哭、七日七夜不絶其声」(史記・伍子胥列伝)、秦哀公を感動させたという。ここでこの故事が踏まえられているかは断定しかねるが、憂うのは申包胥のような忠臣がいるか、と取りたい。李白「申包惟慟哭、七日鬢毛斑」(奔亡道中五首、其四)。

61 壁間 欧草創 壁間 欧が草創 御

62 塵裡 秀苦提 塵裡 秀の苦提 潤

63 鏡破^{ハニス} 濃淡^{ニス} 鏡破りて濃淡を一にす 節

64 社盟並耄倪^{ニス} 社盟 耄倪を並す 竹

65 点^{ニス} 陶陸遠^ヲ 点を点す陶陸遠 潤

66 分^{ヒヲ} 品积 聃尼 品を分つ 聃聃尼 竹

67 趨鯉 信奚^ツ 自^ツ 趨鯉⁽³⁶⁾ 信は奚くよりぞ 御

68 啼鵲 歸去^{カヘンレイヤ} 兮 啼鵲 帰んなんいざ 良

69 夢驚 郷万里 夢驚きて郷は万里 宮

70 字様 水丁溪 字様 水は丁溪⁽³⁶⁾ 雲

(32) 女性の化粧をいう。蘇軾「欲把西湖比西子、淡粧濃抹總相宜」(飲湖上初晴後雨二首、其二)。鏡が割れているので、化粧の濃淡は判然としない。

(33) 老若。『孟子・梁惠王下』「王速出令、反其耄倪、止其重器」。

(34) 陶潜と陸賈。陶淵明は官を捨て貧しい生活に甘んじたのに対して、陸賈は朝政から身を引き、巨額の金の子供に分け生産に供させた(史記・酈生陸賈列伝)。

(35) 『論語・季氏』「嘗独立、鯉趨而過庭」。孔子の子である鯉(伯魚)が小走りで庭を通ったこと。

(36) 『佩文韻府』「丁溪 泉州志德化県南有一一、俗云水画丁羅簪纓、宋時一夕雷雨決流、一縱一横、宛成丁字、邑人程楊修果登高第」。

71 嵐 伝征帆^ヲ 翼^ヲ 嵐は征帆の翼を伝く 良

72 塞 聴^ニ 哀角^ヲ 嘶^ヲ 塞には哀角の嘶を聴く 倫

73 登^ア崇^シ麟閣ノ武 崇きを登^アげて麟閣^{（一七）}の武 御

74 儼^カ飾^ル鵜冠ノ碑 飾るに儼かにして鵜冠^{（三八）}の碑 沅

75 炎^{（三九）}室^カ近^ナ歟^ナ漢 炎室 近きかな漢 竹

76 漏^{（四〇）}天^ハ同^ノ者^ハ黎 漏天 同じ者は黎 澗

77 滴^レ光^ヲ于^ス斗^ヲ潦 光を滴らす 斗を于す潦^{（四一）} 召

78 学^レ古^ヲ級^ノ空^ニ梯 古を学ぶ 空に級^{（四二）}る梯 雲

79 斜^{（四三）}照^ム染^ム烏^ハ背^ヲ 斜照 烏背を染む 倫

80 孤^{（四四）}床^ヲ厭^ム蛭^ヲ思^フ 孤床 蛭思を厭ふ 節

（37）麒麟閣。『漢書・李広蘇建列伝』「甘露三年、单于始入朝。上思股肱之美、乃図画其人于麒麟閣、法其形貌、署其官爵姓名（中略）次曰典属国蘇武。皆有功德、知名当世、是以表而揚之。」前句72を蘇武の体験とした。

（38）金日磾。『漢書・霍光金日磾列伝』「金日磾夷狄亡国、羈虜漢庭、而以篤敬宿主。」

（39）漢王朝は火徳。『漢書』「旗幟尚赤、協於火徳。」

（40）天が漏れたかのように雨の多いこと。蘇軾「千章古木臨無地、百尺飛瀟瀟漏天」（広州蒲澗寺）。「黎」は黎民・

黎庶か。

（41）溜まり水、雨による増水。水が星の光を反射するか。黃庭堅「積潦干斗極、山河皆夜明」。「于」は「干」とすべ

（42）「梯」は丹梯、榮達の道をいう。許渾「官滿定知帰未得、九重宵漢有丹梯」（送上元王明府赴任）。

81 晚^{（四五）}楓^ニ霜^ス任^{スル}彩^ニ 晩楓 霜彩するに任す 重

82 下^{（四六）}米^ヲ畝^ニ催^ス犁^ヲ 下米 畝犁を催す 御

83 傾^{（四七）}日^ニ牽^ス牛^ヲ笠 日に傾く 牽牛の笠 節

84 輶^{（四八）}雷^ヲ安^カ鹿^ノ聲^ヲ 雷を輶^{（四九）}かす 安鹿が聲 竹

85 荔^{（五〇）}遺^ス天^ノ宝^ヲ事^ヲ 荔は天宝の事を遺す 澗

86 蘭^{（五一）}起^ス楚^ノ騷^ヲ 蘭は楚騷の悽を起こす 良

87 讒^{（五二）}鈍^シ無^ス前^ノ刃^ヲ 讒は前無き刃を鈍しとす 沅

88 機^{（五三）}噴^ク難^ニ中^リ磈^ヲ 機は中り難き磈を噴く 雲

89 空^{（五四）}棺^ヲ磨^ク變^ハ易^ニ 空棺 磨は変易 澗

90 百^{（五五）}則^ニ頭^ヲ提^ス 百則 頭は提撕 良

(43) 安禄山。83句の「牛」に対偶するために「禄」を「鹿」に改めたか。鼙は戦鼓、「漁陽鼙鼓動地来、驚破霓裳羽衣曲」(白居易「長恨歌」)。

(44) 『古文真宝』蘇軾「宮中美人一破顔、驚塵濺血流千載。永元荔枝来交州、天宝歲貢取之涪。」(荔枝歎)

(45) 『楚辭・離騷』「戸服艾以盈要兮、謂幽蘭其不可佩」。

(46) 達磨大師は毒殺され埋葬されたが、西方へ帰ったと目撃され、棺にも遺骨がなかった。88句「磴」の連想か。

(47) 宋の禅僧雪竇重顯、『碧巖録』の著者、同書は百則の公案を収録している。「提撕」は教訓、指導。『顔氏家訓』「吾今所以復為此者、非敢軌物範世也、業以整齊門内、提撕子孫」。

91 禅^ニ味^ハ僧^ノ熊^ノ掌^ヲ 禅味は僧の熊掌

92 嘉^ハ羞^ハ彼^ノ雉^ノ翳^ヲ 嘉羞は彼の雉翳

93 時^ニ哉^ニ微^ニ笑^ハ賈^ノ 時かな 微笑の賈

94 道^{ナリ}也^ニ退^ニ身^ノ蠡^ヲ 道なり 退身の蠡

95 棋^ニ計^ハ強^ニ其^ノ弱^ヲ 棋計 其の弱きを強ます

96 粉^ニ粧^ハ汗^ノ以^テ佳^ヲ 粉粧 汗すに佳を以てす

97 妾^ハ尊^ニ鴛^ノ肉^ノ鼎^ヲ 妾は鴛肉の鼎を尊ぶ

98 祖^ハ忘^ス貝^ノ哆^ノ第^ヲ 祖は貝哆の罍を忘す

99 宣^ハ勸^ニ年^ノ宜^ク却^ク 宣勸 年は宜しく却くべし

100 久^ニ要^ハ朝^ノ願^ヲ締^ム 久要 朝は締むることを願ふ

(48) 美味をいう。沈約「洄蕩嘉羞、揺漾芳醴」(三日侍鳳光殿曲水宴應製詩)。

(49) 賈誼か。若くして文才高くしばし孝文帝に進言した。梁懷王が落馬して死んだことに、太傅としての責任を感じ、抑鬱して三十三歳で亡くなった。

(50) 范蠡。越王勾践を輔佐して呉を倒し雪辱したのち政界を退いた。

(51) 兔を捕る籠。孟郊「鸛獸鮮猜惧、羅人巧置罍」(石淙)。

佳第九 慶長十九年九月七日

1 菊^ハ為^メ承^ニ恩^ノ露^ヲ 菊は恩露を承くるが為に

2 德^ニ香^ハ四^ノ海^ヲ皆^シ 德香 四海皆し

3 楓^ハ依^テ余^ノ勝^ニ景^ヲ 楓は勝景を余すに依りて

4 詩興 萬山佳^{ナリ} 詩興 萬山佳なり 御

5 秋色 先於^ス月^ニ 秋色 先^レずること月に於いてす 節

6 世塵 多^ハ滿^ニ街^ニ 世塵 多きは街に滿つ 雲

7 仙厨 閑味^{ナリヤ} 否^一 仙厨は閑味なりや否や 澗

8 官路 利奔 乖^ク 官路 利奔に乖^ズく 竹

9 堯歩 踏^ム陳^ヲ舜 堯歩 陳を踏む舜 良

10 郝禪 補^レ欠^一 媧^ヲ 郝禪^② 欠を補ふ媧 寿洪

(1) 底本の訓点に従つて「月においてす」と訓むと、月が秋の景色を先取するという意になる。訓点を無視して「秋色月より先だつ」と訓む場合は、前句4で詠まれた詩興を催す山の美景が月よりもさきに秋の気配を感じさせる、となる。

(2) 趙州從念のことか。『景德伝灯録』「趙州観音院從念禪師、曹州郝郷人也、姓郝氏」。

11 僧談 分^ツ蘂^一蜜^ヲ 僧談 蘂蜜^③を分つ 重

12 婦礼 有^一梳^一釵^一 婦礼 梳釵有り 外

13 対^テ對^ヲ 鴛^一衾^一 冷^シ 対を扱びて鴛衾冷まし 光勝

14 伝^テ音^ヲ 雁^一札^一 排^ス 音を伝ひて雁札排す 緒

15 心^ニ良^ヲ 牙^ニ信^ハ漢^ヲ 良を心にし信を牙にするは漢 御

16 肉^ニ幹^ヲ 骨^ニ曹^ハ 注^ハ 幹^⑤を肉にし曹を骨にするは注 峰

17 佳境 幾^ク膏^一秣^一 佳境 いくばく膏秣^⑥ 雲

18 幽栖 常^ニ水^一柴^一 幽栖 常に水柴^⑦ 節

19 從^テ吾^ニ 尤^ハ者^一 杖^一 吾に従ひて尤^{けや}けき者は杖 竹

20 給^レ母^ニ 織^ニ成^ス 鞵^一 母に給す 織り成す鞵 澗

(3) 苦い黄檗と甘い蜜。公案として多くの問答を残した趙州は黄檗希運に参じていたことからの連想か。

(4) 漢の使者が上林の雁信を口実に、単于に蘇武の所在を聞き出した(漢書・蘇武伝)。

(5) 唐代画家の韓干、「曹」は曹霸、韓干の師、ともに馬を得意とする。蘇軾「神工妙技帝所収、江都曹韓逝莫留」(韋偃牧馬図)。「注」は渥洼、神馬を産する地。

(6) 車に油を差し、馬に草を与える、旅立ちの用意をいう。

韓愈「膏吾車兮秣吾馬、従子於盤兮終吾生以徘徊」(送李願帰盤谷歌)。

(7) 隱者の住まいをいう。李白「緑水接柴門、有如桃花源」
〔之広陵宿常二南郭幽居〕。

21 幼^{トス}幼^ヲ哺^{スル}児^ニ燕 幼を幼とす 児に哺する燕 洪

22 功^{トス}功^ヲ戦^{シム}勇^ヲ蝸 功を功とす 勇を戦はしむる蝸⁽⁸⁾ 良

23 篆^ニ畦^ヲ煙^ヲ鎖^ヲ断^ス 篆畦⁽⁹⁾ 煙は鎖断 外

24 棧^ニ道^ヲ霧^ヲ遮^リ埋^ム 棧道 霧は遮り埋む 重

25 嘗^ム嶮^ヲ唇^ヲ頭^ヲ蜀 嶮しきを嘗^ム唇頭の蜀⁽⁸⁾ 峰

26 環^ル洲^ヲ夢^ヲ裡^ヲ崖 洲を環⁽¹⁰⁾る 夢裡の崖 勝

27 千^ニ郷^ヲ推^ハ枕^ヲ近^シ 千郷 枕を推さば近し 節

28 率^ニ土^ヲ貢^シ筐^ヲ来^ル 率土 筐ものを貢し来たる 御

29 仁^ニ餌^ヲ擲^ツ民^ヲ網^ヲ 仁餌⁽¹¹⁾ 民網を擲つ 澗

30 手^ニ撓^ヲ挂^ツ祖^ニ牌^ヲ 手撓 祖牌を挂く 雲

(8) 蝸角の戦い。『莊子・則陽』「有国於蝸之左角者、曰蝸氏、有国於蝸之右角者、曰蠻氏、時相与争地而戰、伏尸数万」。

(9) 南宋詩人舒岳祥の庭園か、詩によく詠まれる。また『石門文字禪』にも「但見篆畦間、青煙行未已」(送正上人帰黄龍)ほか用例がみえる。

(10) 杜甫「絶島容煙霧、環洲納曉晡」(大歴三年春白帝城放船出瞿塘峡久居夔府将適江陵漂泊有詩凡四十韻)。

(11) 前句28でいう貢ぎものを受けて、仁義という名で民衆の富を漁る網を撒くという意か。『荀子・王制』「故王者富民、霸者富士、僅存之国富大夫、亡国富篋篋」。

31 蘆^ヲ交^テ勞^レ過^ル渡^ヲ 蘆交ひて渡を過ぐるに勞す 良

32 芍^ヲ発^ケ忽^ル翻^ル階^ニ 芍^ニ発^テけて忽ち階に翻る⁽¹²⁾ 竹

33 舞^ハ象^ヲ箭^ヲ遊^ニ蝶 象箭⁽¹³⁾を舞ふは遊蝶 御

34 戛^ス鼉^ヲ鼓^ヲ怒^ハ蛙 鼉鼓⁽¹⁴⁾を戛すは怒蛙⁽¹⁵⁾ 外

35 戴^テ雲^ヲ林^ヲ絮^ヲ帽 雲を戴きて林は絮帽⁽¹⁶⁾ 重

36 入^テ碓^ニ米^ヲ糠^ヲ篩 碓に入りて米は糠篩 澗

37 宗^ヲ鏡^ヲ誰^カ勤^メ拭^ン 宗鏡⁽¹⁷⁾ 誰か勤めて拭はん 竹

38 健^ニ毫^ヲ姑^ヲ倩^ヲ指^ツ 健毫⁽¹⁸⁾ 姑^ニ倩^ヲ指^ツ 雲

39 榮^ニ辱^ヲ炊^ヲ未^ダ熟^ス 榮辱 炊は未だ熟さず 洪

40 微羽 楽無^レ哇 微羽 楽に哇無^レし 節

(12) 達磨祖師が蘆を浮かべて江を渡ったことを踏まえる。策彦周良「東超海漠救迷情、万里長江一葦横」(渡江達磨賛)。

(13) 芍薬の花が階段の辺りにひるがえる。『文選』謝朓「紅蕖当階翻、蒼苔依砌上」(直中書省)。

(14) 周文王時代の舞曲。『左氏春秋伝・襄公二十九年』「見舞象箏南籥者、曰美哉」。

(15) 鼉皮で作った鼓、音が鼉の鳴き声に似る。『詩経・大雅』「鼉鼓逢逢、矇瞍奏公」。蛙の鳴き声は両部鼓吹(南史・孔圭列伝)を踏まえるか。

(16) 綿入れの帽子か。蘇軾「嶺上晴雲披絮帽、樹頭初日掛銅鉦」(新城道中二首、其一)。

(17) 策彦周良「今年今日永明日、宗鏡百箇湖水中」(到浄慈寺上宗鏡閣)。

(18) 邯鄲の夢。古澗慈稽「青衿若統邯鄲夢、九十風光五十年」(春睡枕書)。

(19) 淫哇、淫声(聚分韻略)、邪淫の音楽。歐陽修「豈可疾淫哇而欲廢置律呂」(与梅聖俞書)。

41 花^ハ、為^メ養^シ賢^ヲ棄^ツ 花は賢を養ふが為に棄つ 勝

42 藻^ハ、從^ニ挑^ム女^ニ俳^ス 藻は女を挑むに從ふにして俳す 潤

43 操^レ琴^ヲ鶯^ノ不^レ野^ナ 琴を操りて鶯野ならず 竹

44 吹^テ角^ヲ鳥^ノ其^リ啾^リ 角を吹きて鳥それ啾たり 節

45 躑^ノ躑^ノ、嵩^ノ奇^ノ産^ニ 躑躑は嵩の奇産 外

46 淡^ニ濃^ニ、吳^ノ美^ノ娃^ニ 淡濃は吳の美娃 洪

47 墮^レ眉^ヲ霜^ノ後^ニ、柳^ノ 眉を墮とす 霜後の柳 雲

48 澣^レ淚^ヲ塚^ノ前^ニ、楷^ノ 涙を澣ぐ 塚前の楷 潤

49 寒^ニ夜^ニ、哽^テ歔^テ蟀^ノ 寒夜 哽びて歔く蟀 良

50 深^ニ閨^ニ、占^フ吉^ヲ尫^ノ 深閨 吉を占ふ尫 御

(20) 詞藻、華麗な詩文。女性に挑むために美辞を連ねて駢麗文を書くこと。

(21) 『詩経・周南』「黄鳥于飛、集於灌木、其鳴啾啾」。

(22) 嵩陽寺のことか。『三体詩』張籍「五渡溪頭躑躑紅、嵩陽寺裏講時鐘」(送李渤)。

(23) 美女の喩え。齊第八63句に既出。

(24) 温庭筠「芙蓉凋嫩臉、楊柳墮新眉」(玉胡蝶)。

(25) 白居易「芙蓉如面柳如眉、对此如何不垂淚」(長恨歌)。塚前の楷とは楷書で書かれた墓誌銘のことか。

(26) 夢占い。『詩経・小雅』「吉夢維何、維熊維羆、維虺維虺」

(秩秩斯干)。

入五台五首、其五)。

51 臥^レ孤^ニ丹^ノ乳^ヲ綴^ル

臥は孤にして丹乳綴る

洪

52 像^ニ久^ク紫^ノ磨^ル霾^ル

像は久しくして紫磨霾る

良

53 離^ル俗^ヲ俗^ノ門^ヲ詰^ル

俗を離るる俗門の詰

雲

54 厭^シ漁^ヲ漁^ノ屋^ヲ懷^ル

漁を厭ふ漁屋の懷

御

55 清^ニ癯^ニ逢^フ雪^ニ竹^ノ

清癯 雪に逢ふ竹

峰

56 疎^ニ影^ヲ漏^ル陽^ヲ槐^ノ

疎影 陽を漏らす槐

節

57 波^ヲ漲^ル改^ム河^ノ旧^ヲ

波漲りて河の旧きを改む

澗

58 隱^ニ真^ニ居^ス市^ノ瘵^ニ

隱真にして市瘵に居す

勝

59 知^テ機^ヲ鷗^ノ似^ク難^ニ

機を知りて鷗は難むに似たり

御

60 念^フ僂^ノ鵠^ノ呼^ブ倪^ト

仏を念じて鵠は倪と呼ぶ

竹

(27) 黃庭堅「扶疏上翠蓋、磊落綴丹乳」(顯聖寺亭枸杞)。
(28) 上等の黄金、ここは黄金の仏像をいう。『虛堂錄壘耕』

「世尊臨入涅槃、以手摩胸、普告大衆、汝等善觀吾紫磨金色之身」。貫休「電激青蓮目、環垂紫磨金」(遇五天僧

(29) 維摩詰、在家の弟子。蘇軾「欲把新詩問遺像、病維摩詰更無言」(孤山二詠、並引、其二)。

(30) 「瘵市」という語を、平仄を調整するために「市瘵」としたか。曾慥『類說』「蜀有瘵市、間旦集如瘵」。ここは単に市場の意を表す。

(31) たくらむ心、「鷗鷺忘機」(列子・黃帝)を踏まえる。「難」は不明。

(32) 倪、かぎり(碧巖錄・一六則)。

61 峰^ハ巒^ニ垂^ル布^ヲ

峰は巒たる垂布

外

62 棚^ハ鬚^ニ鬢^ヲ閼^ニ叉^ノ

棚は鬚鬢たる閼叉

御

63 自^ミ珍^ニ棕^ノ扠^ヲ杜^ノ

自ら珍なりとす 棕扠の杜

雲

64 至^ニ樂^ニ菜^ノ羹^ヲ回^ル

至樂 菜羹の回

節

65 游^ニ輩^ニ空^ノ諸^ヲ有^ヲ

游輩 諸有を空す

良

66 鳳^ノ皇^ノ匪^ス等^ノ差^ニ

鳳皇 等差に匪ず

外

67 酒^ノ星^ノ天^ノ將^ヲ聖^ヲ

酒星 天の將聖

竹

68 棋^ノ雹^ノ地^ノ商^ノ顔^ノ

棋雹 地の商顔

洪

69 側^チ殖^{テリ} 傍^ニ櫓^ニ橘^ニ 側^{そばだ}に殖^殖てり 櫓^櫓に傍^{たづ}つ橘^橘 重

70 又^又生^ス湿^フ雨^ニ菱^ニ 又生^又ず 雨^雨に湿^湿ふ菱^菱 竹

(33) 垂^垂れ流^流れる瀑^瀑布^布か。

(34) 「閼」は不明、「閼又」の誤りか、夜叉の意(佩文韻府)。

蘇轍「頭陀旧所識、天寒髮鬢鬢」(次韻子瞻上元見寄)。

(35) 棕^棕払、棕^棕欄^欄で作^作った払^払子^子。杜甫「棕^棕払^払且^且薄^薄陋^陋、豈^豈知^知身^身効^効能^能」(棕^棕払^払子^子)。

(36) 顔^顔回。「菜羹」との取り合わせは、韓愈「人固有薄^薄卿^卿相^相之官^{之官}千^千乘^乘之位^{之位}而甘^甘陋^陋巷^巷菜^菜羹^羹者」(与崔群書)に基づくか。

(37) 仏語、すべて、一切。蘇轍「自有真無遍諸有、灯^灯火^火何^何碍^碍也嫌^嫌渠^渠」(答孔平仲二偈)。

(38) 等級、相違。『顏氏家訓』「星^星与^与日^日月^月、形^形色^色同^同爾^爾、但^但以^以大^大小^小為^為其^其等^等差^差」。杜甫「賢^賢愚^愚誠^誠等^等差^差、自^自愛^愛各^各馳^馳驚^驚」(詠懷二首、其二)。

(39) 星^星の名、またよく酒^酒を飲^飲む人^人をいう。「將^將聖^聖」は『論語・子罕』「固^固天^天縱^縦之^之將^將聖^聖、又^又多^多能^能也」。

(40) 商^商山^山四^四皓^皓。蘇軾「白^白髮^髮四^四老^老人^人、何^何曾^曾在^在商^商顏^顏。煩^煩君^君紙^紙上^上影^影、照^照我^我胸^胸中^中山^山」(書王定国所藏王晋卿画着色山二首其一)。

(41) 一句は建物のすぐ傍^傍らに橘^橘を植^植えることか。ただ「殖」の訓み方は難解。『万葉集』「橘^橘の下^下照^照る庭^庭に殿^殿建^建てて酒^酒みづきいます我^我が大^大君^君かも」(卷十八、四〇五九)は逆^逆の場合^{場合}。

71 秦^秦書^書 燒^ト不^不尽^尽 秦^秦書^書 燒^燒けども尽^尽きず 潤

72 秦^秦祭^祭 狩^ノ而^而柴^柴 秦^秦の祭^祭 狩^狩りて柴^柴たく 竹

73 螢^螢点^点外^外燎^燎合^合 螢^螢点^点して外^外燎^燎合^合す 勝

74 鵜^鵜双^双同^同穴^穴偕^偕 鵜^鵜は双^双にして同^同穴^穴の偕^偕 潤

75 槿^槿籬^籬紅^紅暫^暫借^借 槿^槿籬^籬 紅^紅は暫^暫借^借 外

76 松^松蔭^蔭緑^緑相^相挨^挨 松^松蔭^蔭 緑^緑は相^相挨^挨す 節

77 廬^廬秀^秀於^於冬^冬嶺^嶺 廬^廬は冬^冬嶺^嶺より秀^秀づ 御

78 爐^爐悲^悲触^触殿^殿階^階 爐^爐は殿^殿階^階に触^触るることを悲^悲しむ 潤

79 許^許身^身輕^輕厚^厚禄^禄 身^身を許^許して厚^厚禄^禄を輕^輕んず 洪

80 濟^濟衆^衆設^設枯^枯查^查 衆^衆を濟^濟して枯^枯查^查を設^設く 雲

(42) 柴^柴を燃^燃やして天^天を祭^祭る儀^儀礼^礼、柴^柴望^望。『後漢書』「(中元元

年)辛卯、柴^柴望^望岱^岱宗^宗、登^登封^封太^太山^山」。

(43) 鵠^鵠に同^同じ、鴛^鴛鴦^鴦の大^大きいもの。

(44) 鍾^鍾爐^爐。『事物紀原』「臣^臣終^終南^南進^進士^士鍾^鍾爐^爐也、因^因応^応拳^拳不^不捷^捷、舐^舐殿^殿階^階而^而死^死、奉^奉旨^旨賜^賜緑^緑袍^袍而^而葬^葬」。

(45) 「枯^枯槎^槎」に同^同じ。枯^枯れた切^切り株^株、また筏^筏、小^小舟^舟。杜甫「枯^枯

查卷拔樹、礪硯共充塞」(三川観水漲二十韻)。蘇軾「蜀江久不見滄浪、江上枯槎遠可將」(和子由木山引水二首、其二)。

81	櫛 ^{ツル} 疾 ^ニ 夏 ^ニ 忙 ^一 了 ^了	疾に櫛る 夏は忙了	良
82	延 ^{ルハ} 齡 ^ヲ 彭 ^カ 匹 ^一 儕	齡を延るは彭が匹儕 ⁽⁴⁶⁾	洪
83	主張 ^ニ 靈洞 ^ノ 鶴	主張 靈洞の鶴	重
84	婢 ^一 視 ^ニ 駢 ^ス 程 ^ノ 駟	婢視 駢程の駟	雲
85	答 ^{ルハ} 暮 ^ニ 笛 ^ヲ 村 ^ノ 鐸	暮笛に答ふるは村鐸	御
86	透 ^ス 関 ^ヲ 板 ^ヲ 野 ^ノ 榧	関板を透すは野榧 ⁽⁴⁷⁾	外
87	叢 ^ニ 衰 ^{ヘテ} 鐘 ^ニ 緩 ^ニ 打 ^ツ	叢衰へて鐘は緩やかに打つ	雲
88	氷 ^ニ 解 ^テ 筧 ^ヲ 流 ^ル 渚 ^ル	氷解けて筧は流れ渚る ^{ナガ}	竹
89	何 ^ノ 賊 ^ヲ 偷 ^ム 春 ^ヲ 杏 ^ヲ	何れの賊して春を偷む杏	節
90	好 ^ニ 速 ^ニ 宜 ^{シキ} 瀑 ^ニ 簾 ^ニ	好速 瀑に宜しき簾 ^{ふるひ}	洪

(46) 同類の意、韓愈「猛虎雖云惡、亦各有匹儕」(猛虎行)。「彭」は長寿の彭祖、八百歳まで生きたという(列仙伝)。

(47) 禅語、『碧巖録』に「却去江外打野榧」とみえる。また「関板」も禅語、「関板子」とも、緊要の意。

91	称 ^{スルハ} 瀟 ^ニ 湘 ^ノ 故 ^ト 鷗	瀟湘の故と称するは鷗	外
92	存 ^{スルハ} 朔 ^ニ 漠 ^ノ 忠 ^ヲ 覘	朔漠 ⁽⁴⁸⁾ の忠を存するは覘 ^{かい}	良
93	涼具 ^ニ 北窓 ^ノ 簾	涼具 北窓の簾	御
94	瀾 ^ハ 涵 ^ス 西 ^ノ 岸 ^ノ 蓑	瀾は涵す 西岸の蓑	節
95	粘 ^レ 泥 ^ニ 萍 ^ヲ 固 ^ス 葦	泥に粘して萍は葦を固す	雲
96	泣 ^テ 釜 ^ニ 豆 ^ヲ 燃 ^カ 黠 ^{カラ}	釜に泣きて豆黠 ^{まめからや} を燃く	御
97	挽 ^ハ 八 ^ノ 斗 ^ヲ 才 ^ヲ 力	八斗 ⁽⁴⁹⁾ を挽くは才力	峰
98	演 ^{ルハ} 三 ^ニ 墳 ^ヲ 習 ^ヲ 斎	三墳 ⁽⁵⁰⁾ を演ずるは習斎	洪
99	御 ^ニ 詞 ^ヲ 儒 ^モ 不 ^レ 及	御詞 儒も及ばず	澗
100	祇 ^ニ 劫 ^ニ 寿 ^ヲ 無 ^シ 涯 ^リ	祇劫 寿崖 ^ほ り無し	節

(48) 北方の砂漠。杜甫「去紫台連朔漠、独留青塚向黄昏」(詠懷古跡五首、其三)。

(49) 『蒙求』「子建八斗」など、曹植の才能の高さをいう。前

句 95 の「七步詩」を受ける。ここは同時に穀物などの量をいう。

(50) 古代の書物。『左伝・昭公十二年』「是能読三墳、五典、八索、九丘」。蘇軾「先登搏戰事斬級、區區何者為三墳」。「習齋」は書齋のことか。

灰第十 慶長十七年三月十三日

1 翼^ハ就^レ牡丹^ノ卵 翼は就く 牡丹の卵

2 却^ハ嫌^ハ飛^レ去^ノ催^ヲ 却つて嫌ふ 飛去の催すことを

3 音^ハ伝^フ羊^ノ柳^ノ燕 音は伝ふ 羊柳の燕

4 且^ス喜^ハ遠^{ヨリ}方^ニ来^ル 且喜ばすらくは遠方より来たることを

5 鐘^ス曙^ヲ欲^ス西^ノ月^ニ 鐘曙けて西ならんと欲する月 景洪 璣

6 柄^ハ移^テ拱^{スル}北^ニ台^ニ 柄移りて北に拱する台⁽¹⁾ 節

7 輕^シ聃^ノ韓^ノ道^ノ德^ニ 聃を輕んず 韓が道徳 御

8 用^ニ哲^ニ軾^ノ文^ノ才^ニ 哲に用ひらる 軾が文才 雲

9 鵬^モ亦^レ再^ニ生^ル蜀^ニ 鵬もまた再び蜀に生まる⁽²⁾ 澗

10 屍^ハ其^ノ多^ハ伏^ス雷^ニ 屍は其の多くは雷に伏す 竹

(1) 三台。『晋書』「三台六星、兩兩而居、起文昌、列抵太微。一曰天柱、三公之位也。在人曰三公、在天曰三台、主開德宣符也」。

(2) 黃庭堅「儒林丈人有蘇公、相如子雲再生蜀」(次韻王炳之惠玉版紙)。

11 雨^{ラス}紅^レ秋^ノ怨^ノ涙 紅を雨らす 秋怨の涙 良

12 空^ニ色^ニ世^ノ尊^ノ胎 空色⁽³⁾ 世尊の胎 重

13 僧^ハ護^ス談^ノ禪^ノ竹^ヲ 僧は談禪の竹を護す 緒

14 妾^ハ希^フ連^ノ理^ノ槐^ヲ 妾は連理の槐を希ふ⁽⁴⁾ 賢

15 服^ス涼^ヲ壬^ノ癸^ノ服 涼を服す 壬癸の服 璣

16 杯^ニ海^ヲ地^ノ天^ノ杯 海を杯にす 地天の杯 洪

17 鷺^ハ立^テ知^ル江^ノ浅^ヲ 鷺立ちて江の浅きを知る 節

18 虫^ハ吟^ミ添^ニ夜^ノ哀^ニ 虫吟じて夜の哀れを添ふ 御

19 灯^ハ吾^ノ床^ノ主^ノ伴 灯は吾が床の主伴⁽⁴⁾ 雲

20 詩^ハ某境^ノ良媒^ニ 詩は某の境の良媒⁽⁵⁾ 潤

(3) 前句の雨から空の色を詠みつつ、花を惜しむ秋怨から

「色即是空」を付けた。

(4) 仏語、主体と従属。『臨濟録』「互是主伴。出則一時出。

一即三三即一」。

(5) 『詩経・衛風』「匪我愆期、子無良媒」。次句の「霜葉」と御溝葉を踏まえる。斉第八32句に既出。

21 霜葉舟如^レ画^カ 霜葉 舟画が如し⁽⁶⁾ 竹

22 宮花錦似^レ裁^{イスルニ} 宮花 錦裁するに似たり⁽⁷⁾ 良

23 暖園禽飽^{マデ}睡^ル 暖園 禽は飽くまで睡る 重

24 春社蟻追^レ陪 春社 蟻は追陪 節

25 今^ハ是勃興^ノ李 今⁽⁸⁾是 勃興⁽⁸⁾の李 御

26 古^ハ稀至孝^ノ菜 古稀 至孝⁽⁹⁾の菜 竹

27 嘯^デ風^ニ松起^ル舞 風に嘯^{うそがき}て松起ちて舞ふ 洪

28 扱^テ徑^ニ菊親^ミ栽 徑を扱^みびて菊親^みら栽う 潤

29 蛙^ハ続^ニ晋^ノ哇^ヲ甚^ニ 蛙は晋哇の甚しきを續く 賢

30 雁^ハ思^ニ漢^ノ節^ヲ回^ル 雁は漢節の回るを思ふ 璚

(6) 一句のものと語順は難解。「舟画が如し」という訓みは

仕方ないが、正しくは「霜葉如画舟」であろう。すなわち一句は(御溝に浮かぶ)紅葉が彩られた舟のようだ、

という意。ここは二文字目の「葉」が仄音であるため、四文字目には平音字を用いるべきところ、同じ仄音の

「画」を避けて平音の「如」を使つたと推測される。

(7) 宮花の華美さを錦と喩える。王安石「禁柳万条金細燃、

宮花一段錦新翻」(崇政殿詳定幕次偶題)。この一句も前句と同様に平仄の関係で語順が調整されたか。正しくは

「似裁錦」となるべきところ、二文字目の「花」が平音であるため、四文字目には同じ平音の「裁」を避けて仄音の「似」を配して「錦似裁」とした。

(8) 李白。前句の「蟻」は春社の時に飲まれる「蟻酒」で、

飲酒から李白を連想した。また韓愈「勃興得李杜、万類困陵暴」(薦士)とある。

(9) 古稀の年になっても五色の服を着て老年の親を楽しませる老萊子のこと。『二十四孝』「戲彩娛親」などにみえる。

(10) 晋代の音楽、用例は未見。「哇」は淫哇、邪淫な音楽。佳第九40句に既出。嵇康「目惑玄黄、耳務淫哇」(文選・養生論)。

31 屐^ハ痕疑^レ嘯^{カト}雪^ヲ 屐痕 雪を嘯むかと疑ふ 潤

32 棋^シ子^{スル}等^ニ重^レ台^ニ 御 棋子 台を重ぬるに等し

33 真^ハ隱^ニ莫^ニ如^ク橘^ニ 節 真隱 橘に如くはなし

34 靈^ハ神^ニ只^ニ愛^ス梅^ヲ 潤 靈神^{（一）} ただ梅を愛す

35 謫^ハ応^ニ諸^ノ苦^ヲ最^ニ 良 謫は応に諸苦の最なるべし

36 約^ハ奈^ニ一^ニ歎^ノ纔^ニ 璘 約は一歎の纔なるをいかんせん

37 愁^ハ館^ニ蛩^ニ為^レ長^ニ 竹 愁館 蛩は長きを為す

38 堅^ハ氷^ニ狐^ニ有^レ猜^ニ 御 堅氷 狐は猜有り

39 首^ハ丘^ニ樵^ニ屢^ニ倦^ニ 潤 丘に首して樵しばしば倦む

40 履^ハ嶮^ニ客^ニ云^ニ廻^ニ 重 嶮を履みて客云に廻る

(11) 二つの橘を割ったところ、それぞれ将棋を楽しむ二人の
老人が現れたという故事、「橘中四老」（太平広記）。宋

・劉克莊「初隱靈芝处、終逃小橘中」（商翁）。

(12) 天神菅原道真か。

(13) 顔之推『顏氏家訓』「狐之為獸又多猜疑、故聽河水無流水声、然後敢渡」。許渾「死酬知己道終全、波暖湖水且自堅」（経故丁補闕郊居）。

(14) 狐は古巢のある方向へ頭を向けて死ぬという。故郷を恋う表現。『礼記』「古之人有言曰、狐死正首丘、仁也」。屈原『楚辞・九章』「鳥飛反故鄉兮、狐死必首丘」（哀郢）。

41 度^ハ衆^ヲ石^ノ橋^ノ諗^ニ 御 衆を度す 石橋の諗

42 尋^ハ師^ヲ煙^ノ水^ノ財^ニ 良 師を尋ぬ 煙水の財

43 豈^ハ防^ニ知^レ識^ノ賊^ニ 節 あに防がんや 知識の賊

44 美^ハ譽^ニ狀^ノ頭^ノ魁^ニ 潤 美譽 狀頭の魁

45 何^ハ白^ニ読^ニ書^ノ眼^ニ 洪 何ぞ白からん 読書の眼

46 還^ハ緇^ニ伝^ノ粉^ノ腮^ニ 節 還りて緇る 伝粉の腮

47 汗^ハ顔^ニ輪^ノ我^ニ晏^ニ 賢 汗顔 我に輪く晏

48 披^ハ靄^ヲ打^レ参^ヲ裴^ニ 潤 靄を披す 参を打する裴

49 柏^ハ祖^ノ庭^ノ奇^ノ觀^ニ 璘 柏は祖庭の奇觀

50 棹^ハ漁^ノ村^ノ乃^ニ欵^ニ 竹 棹は漁村の乃欵

(15) 「諗」は告ぐ、または思う意。『詩経・小雅』「豈不懷帰、是用作歌、将母来諗」。「石橋」は仏教天台宗発祥の天台

山にある石橋を指すか。宋之問「待入天台路、看余度石橋」(靈隱寺)。

(16) かすみけむる水面。劉禹錫「煙水五湖如有伴、猶憶堪作釣魚翁」(白舍人見酬拙詩因以寄謝)。

(17) 状元に同じ。

(18) 顔に白粉を付けること。『世説新語・容止』「何平叔美容儀、面至白、魏明疑其伝粉」。

(19) 前句に続く何晏的故事。『世説新語・容止』「正夏月、与湯餅、既啖、大汗出、以朱衣自拭、色転皎然」。

(20) 裴休、唐の能臣、黄檗禪師に参じた。虎関師鍊『済北集』「北秀之張説、令滔之宋璟、馬祖之權徳興、紫玉之千頤、黄檗之裴休、是皆宰輔維持唐室者也」(宗門十勝論)。

(21) 正しくは「欸乃」。二字とも灰韻仄音、順番変えの原因は不明。舟を漕ぐ棹の音、また舟歌の意。『聯珠詩格』に元結の詩「欸乃曲」がある。

51 浴 駕 衣 儼 飾^{カニ} 浴 駕 衣 儼^セかに飾る 良

52 瘦 馬 軋 横 推^ス 瘦 馬 軋⁽²⁾を横に推す 潤

53 籍 与^リ 從 遊 杖 籍 与⁽²³⁾ 從へて遊ぶは杖 竹

54 愬^カ 軍 含 走 枚 愬⁽²⁴⁾が軍 含みて走るは枚 御

55 戦 一 函 峰 伍 一 伍 戦 一 函 峰 伍⁽²⁵⁾は伍伍たり 璘

56 旧 一 好 日 一 偲 旧 好 日 びに偲⁽²⁶⁾たり 賢

57 新 一 緑 一 善 隣 一 宝 新 緑は善隣の宝 潤

58 豫 一 樟 一 希 世 材 豫 樟は希世の材 璘

59 随 一 波 一 鷗 出 一 没 波に随ひて鷗は出没す 節

60 破 一 曉 一 兔 傾 類 曉を破りて兔は傾類す 重

(22) 車の轅の端に衡(よこぎ)を付けてとめるくさび。韓愈「已窮仏根源、粗識事軋軋」(送文暢師北遊)。

(23) 阮籍。東平太守となった時は驢馬に乗って赴任した(芸文類聚)。

(24) 唐の名将李愬、「含枚入蔡州」という故事。雪夜に急行軍して割拠している蔡州を奇襲した(旧唐書)。欧陽修「(秋風) 縱鏖鏖鋒、金鉄皆鳴、又如赴敵之兵、銜枚疾走。」(古文真宝「秋風賦」)。

(25) 「伍」は交わる、また古代軍隊の編成単位など。熟語として「伍伍」は杜牧「綺席草芊芊、紫嵐峰伍伍」(題池州弄水亭)と見えるが、漢詩の用例は稀であり、並ぶ様子の意味か。

(26) 友人同士の励まし合うこと。『論語・子路』「朋友切切偲偲」。

61 南^一越^一楚^一礎^一切^一 南越 楚礎は切なり 御

62 東^一邾^一魯^一拆^一厓^一 東邾^{（魯の）} 魯柝^{（は）}は厓^{（が）}たり 賢

63 礼^一云^一居^一敬^一孔^一 礼と云ふ 敬に居る孔^{（二）} 重

64 来^一也^一定^一儲^一崔^一 来たるや 儲を定むる崔^{（二）} 璘

65 増^一重^一養^一賢^一鼎^一 重を増す 賢を養ふ鼎 洪

66 相^一攸^一釣^一位^一限^一 攸を相る 位を釣る限^{（三）} 賢

67 情^一濤^一誰^一恣^一溺^一 情濤 誰が溺を 恣^{（ほ）}にす 璘

68 除^一夕^一我^一賾^一 除夕 我が賾^{（を）}なるを賾^{（お）}のる 澗

69 爆^一竹^一冬^一雷^一瑞^一 爆竹は冬雷の瑞 御

70 院^一藜^一凍^一雨^一皚^一 院藜は凍雨の皚たり 竹

(27) 春秋時代魯の小さな隣国。『左伝・哀公七年』 「魯擊柝聞於邾」。

(28) 『論語・雍也』 「居敬而行簡、以臨其民、不亦可乎」。

(29) 隠遁していた商山四皓が漢の太子趙王如意に補佐役として迎えられ、その太子の地位を確たるものにした（史記・留侯世家）。 商山四皓のうち、夏黄公は姓が崔、名が

広。

(30) 善い場所を選ぶこと。蘇軾「餘齡会有適、独往豈相攸」（政輔既見和復次前韻慰鼓盆勸学仏）。

71 生^一施^一山^一二^一八^一 生まるる施^{（三）} 山は二八 節

72 睥^一華^一築^一于^一思^一 睥たる華^{（三）} 築は于思 良

73 棄^一甲^一避^一寒^一菜^一 甲を棄て避寒の菜 澗

74 鋪^一茵^一承^一露^一台^一 茵を鋪く 承露の台 御

75 漆^一交^一仙^一与^一鶴^一 漆交 仙と鶴と 重

76 玉^一質^一老^一如^一鮎^一 玉質 老いて鮎^{（さめ）}の如し 洪

77 烏^一帽^一鬢^一藏^一素^一 烏帽 鬢は素を藏す 節

78 青^一篇^一毫^一磨^一煤^一 青篇^{（三）} 毫は煤を磨す 竹

79 七^一之^一猷^一獨^一興^一 七の猷^{（三）}は獨興^{（三）} 賢

80 大^一禹^一夏^一母^一鍾^一 大禹 夏は母鍾 璘

(31) 西施、山の美しさの比喻。

(32) 『左伝・宣公二年』 「宋城、華元為植巡功、城者謳曰、睥

其目、蟠其腹。棄甲而復。于思于思、棄甲復来」。「築」は宋城を築くこと。次73句の「棄甲」もこれに基づく。

(33) 青編は書籍の意。黄庭堅「洗硯磨松煤、揮洒至日没」(林為之送筆戲贈)。

(34) 前句78の墨を研くことから書家の王子猷を連想し、「独興」は子猷尋戴の故事。

81 碑断^テ魚^ヲ乎^カ魯 碑断ちて魚たらんかは魯

良

82 廟荒^テ熊^ノ又能^ニ 廟荒れて熊また能

潤

83 禁^ス蘇^ヲ消^シ恨^ヲ草 蘇を禁ず 消恨草

璘

84 譬^レ婦^ノ遇^レ凶^ニ獲 婦に譬へて凶に遇ふ獲

竹

85 灘急^ニ帆^ヲ傷^ム水^ヲ 灘急にして帆水を傷む

潤

86 炉^ニ圜^テ字^ヲ画^ス灰^ニ 炉に圜みて灰に画す

御

87 郷^ノ緘^ヲ雖^ニ罕^ニ見^ト 郷緘 罕に見ると雖も

洪

88 午^ノ梵^ヲ益^シ禳^ヲ災^ヲ 午梵 益ます災ひを禳ふ

節

89 叢^ハ借^テ簡^ヲ川^ノ潤^ヲ 叢は簡川の潤を借る

良

90 溪^ハ求^テ遠^ヲ社^ノ哈^ヲ 溪は遠社の哈を求む

竹

(35) 『抱樸子・遐覽』「諺曰、書三写、魚成魯、虛成虎」。こ

こは断碑の字形が判別しかねることをいう。

(36) 能は熊の一種(説文)。『太平広記』「鯨 堯使鯨治洪水、

不勝其任、遂誅之。鯨于羽山、化為黃能、入于羽泉。今

会稽人祭禹廟不用能。水居曰能、陸居曰熊也」。

(37) 蘇樵、草取りや樵の意で、消恨草を刈られないようにす

ること。

(38) 『詩經・国風』「中谷有蓷、嘆其乾矣、有女化離、嘔其嘆

矣、嘔其嘆矣、遇人艱難」。

(39) 故郷から文字を織り込んである錦が届けられた故事(晋

書・列女伝「濤妻蘇氏」。前句84「字」の連想。李白「況

有錦字書、開緘使人嗟」(久別離)。

(40) 正午の誦經の声。王安石「午梵隔雲知有寺、夕陽歸去不

逢僧」(遊鍾山)。

(41) 「簡川」は不詳、「簡」は人名か。

(42) 東晋の名僧慧遠が廬山東林寺で結んだ白蓮社。「哈」は

虎溪三笑の故事。

91 芳^ハ從^テ蓮^ヲ謝^ヲ歌 芳は蓮の謝すより歌む

璘

92 業^ハ為^テ筆^ヲ耕^ス一^ニ培^ス 業は筆の耕すが為に培す

重

93 刈^テ楚^ヲ窓^ヲ催^ス景^ヲ 楚を刈りて窓景を催す

御

94 絶^テ芸^ヲ硯^ヲ点^ス埃^ヲ 芸を絶して硯は埃を点す

潤

95 感^レ恩^ヲ 吳^ノ鳳^ノ杜^ノ 恩を感じず 吳鳳⁽⁴⁾の杜⁽⁵⁾ 賢

96 争^レ族^ヲ 駿^ノ驢^ノ恢^ノ 族を争ふ 駿驢の恢 良

97 夢^ハ入^リ戯^リ 三^ノ昧^ニ 夢は戯の三昧に入る 竹

98 祝^ハ祈^ル 寿^ノ億^ノ姪^ヲ 祝は寿の億姪⁽⁴⁾を祈る 御

99 惜^デ帰^リ 靡^リ落^リ日^ヲ 帰るを惜しみて落日を靡⁽⁴⁾く 節

100 懷^レ惠^ヲ 仰^リ高^ノ陔^ヲ 惠を懷ひて高陔を仰ぐ 洪

(43) 小枝を刈り取る。『詩経・国風』「翹翹錯薪、言刈其楚」
(漢広)。

(44) 「芸」は書虫を避けるために用いられる香草。李賀「細

縹両行字、蟄虫蠹秋芸」(自昌谷到洛後門)。ここは香草
が絶え、硯も埃を蒙り、学業を疎かにしている様子をい

(45) 「天呉」は水神の名(山海経)、「紫鳳」は伝説上の鳥。

ここは杜甫「北征」の「天呉及紫鳳、顛倒在短褐」に基
づく。

(46) 極めて長い時間。『集韻』「十兆曰経、十経曰姪」。「姪」
に通じる。貫休「君不見釈梵諸天寿億姪、天上人間去復
来」(送盧舍人三首、其三)。

(47) 『淮南子・覽冥訓』に見える魯陽揮戈の故事。江第三第
4句に既出。

(よう こうほう・武蔵野大学講師)